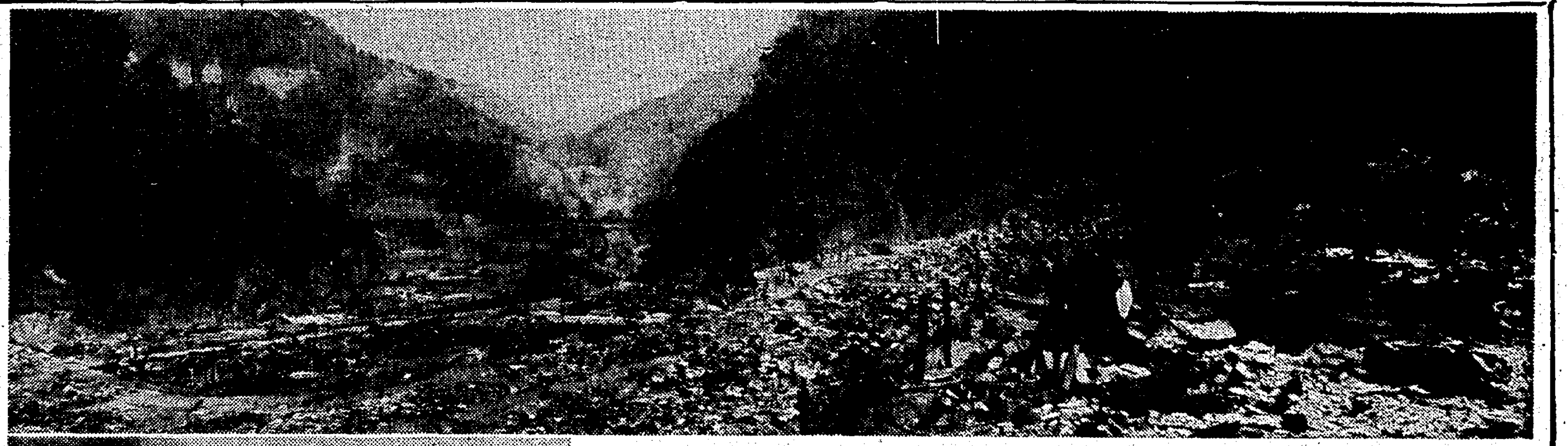


設備近代化を目ざす

復旧の意気高い田老鉱山

鉛、亜鉛精練に重点

社宅も一新する方針

ラサ工業（東京都中央区京橋一丁目一番地七）田老鉱業所は林野火災で坑内施設は残ったものの、選鉱場、精錬場はじめ事務所、社宅街の地上施設が全焼して、壊滅に近い打撃を受け再起が心配されているが、同社としては鉱業所焼けあと整理の終わりしだい復旧工事に着手、六ヵ月で完成、操業する計画で、田老鉱業所は火災を機に設備近代化の意気込みに燃えている。

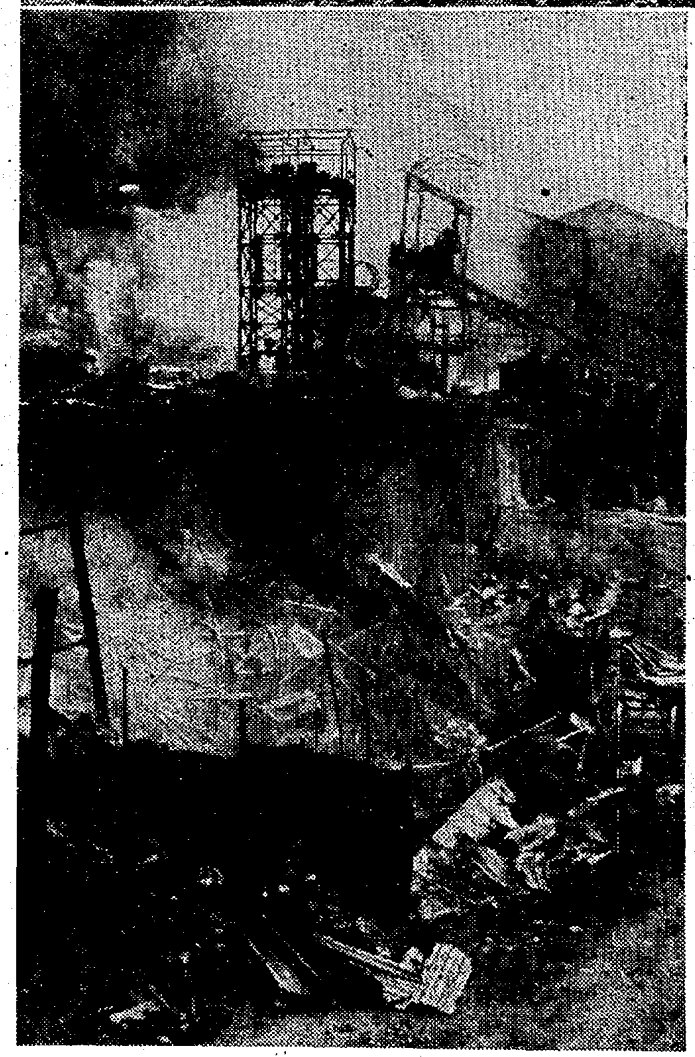
【東京支社発】ラサ工業本社では三十日以来吉見社長を陣頭に連続的に幹部会議を開いて再建対策を協議している。松村専務、西厚生課長、田村財務課長が現地で被害状況を調べているが、東北電力はヘリコプターを使って動力復旧工事を急いでおり、配電線は一日中に完了の見とおしで、これら緊急対策に必要な工事と並行して再建策が検討されている。吉見社長以下幹部の意向としては保険金（四億三千五百万円）を有力財源として早期復旧の実現をめざしているが、昨年ボーリングを行なった結果、従来の硫化、銅鉱のほか高品位の鉛、亜鉛鉱脈を発見、こんご鉛と亜鉛の精錬を主体とする操業態勢をつくるという基本路線を確立、これにともなって選鉱場の拡張など鉱山施設全般の整備が必要となっている時期だけに、今回の火災を契機に全面的に施設を一新する。

さらに全滅した社宅は老朽化の傾向が強かったが、これについても四月に労使の間で社宅改善の協約が成立した直後だけに、近代的な社宅を建設する計画である。しかし、こんどの被害調査で復旧費がどのていどかかるか、これが保険金の財源でどのていどまかなえるか、まだ相当の日時を必要とするようで、社側は当面緊急対策に主眼をおく

十一月完成を目標に

松村専務ら現地調査

【西川・藤原特派員】松村ラサ工業専務は三十一日田老町の被災地を視察、関係方面にあいさつし、従業員を激励した。同氏の話によると、まず従業員の落ち着き先と生活用具を整えることに力を注ぎ同時に焼け跡の整理を進めて、事業所、住宅ともこんごは火災の恐れがないものにする。同所の施設は古くからの機械器具が多く、すでに旧式となり、能率もあがらないので拡充計画をたてていた矢先でもあり、この際選鉱処理能力を六〇〇トンから七〇〇トンにするという。また住宅は全部軽量鉄骨の二階建とし、事業所と住宅その他の厚生施設や学校、病院、郵便局などの公共施設も現状復旧でなく新構想のもとに区画整理して決定する。事業所も新時代に即したものにするため選鉱場その他の設備場所を再検討して移転した方がよいものはこの際移転し能率のよい新しい機械を設備する。期間はできるだけ急ぎ十一月まで全部を完成させる。社宅の工事も同時に進め、できたところから従業員を入れ、これも最終的には十一月までに全部終わって全従業員を新しいアパート形式の住宅に収容し、田老鉱業所の面目を一新するといっている。応急処置のひとつとして本社から衣類千五百点が三十一日発送された。炊事道具などの家庭用具も会社でできるだけそろえて配給し、さしあたっての生活に支障のないよう力を注ぐ。



【写真は㊤一面に焦土と化した田老鉱業所（左上方が選鉱場）㊦焼けて鉄骨となった選鉱場】

【写真は焼け跡を視察している松村専務＝右側】

救援物資も届かず

悲惨きわめる一家も

全滅した箱石部落

宮古市崎山箱石は同市の中心から六キロ離れた山に囲まれた部落で、住家三十一戸が焼失した。とくに上箱石は林業や製炭業農家十二戸のうち一世帯を残して十一戸が全焼した。市議佐々木市二郎さん（六二）方では焼け残った土蔵を仮住宅にするため、三十一日から工事に着手、静まり返った山あいに早くも復興のツチ音を響かせているが、被災者には気の毒な人が多く製炭業有原仁助さん（四二）の一家は働き手の仁助さんが三年前から胸を病んで県立宮古病院で闘病生活中の留守に被災した。

十三をかしらに四人姉妹をかかえた妻ハツミさん（四三）は、働き手がないうえに山火事の災厄にあい、衣類も焼かれ立ち上がる気力さえなくなっている。宮古市からは毎日にぎりめしが配られているほかは毛布、日用品などの救援物資は未着。おそすぎる救援の手は被災者をいらだたせている。

上箱石の農業横田清三郎さん（五〇）一家は物置きの焼け跡から砂と灰をかぶったミソだるを掘りおこし使えそうな部分をより分けている姿は痛ましい限りである。

【写真はミソをより分ける横田さん一家】

良心的なサービスを

宮古商工会議所、業者に要望

宮古商工会議所では大火による物価高を防止するため、三十一日同市内の商店、工場はじめ大工、左官などの建築関係技能者に協力を求めるチラシを配布した。チラシは被災者に対する見舞いと復興への贈り物として各関係業界の良心的サービスを要請している。

被災者には割引運賃など

盛鉄局特別措置

盛鉄局は二十九、三十両日の低気圧による強風、火災の被害状況を三十一日まとめ、被災者には救助物資、応急建築材料輸送に無料または五割引運賃の特別措置をとることにした。同局管内の鉄道被害は運転関係で運休、客貨合わせて東北本線十七本、本支線は釜石二本、山田五本、八戸三十八本。施設関係被害の復旧見積もり費は軌道百二十四万八千円、停車場、建物八千五百四十万円、配電線、電気保安、電信線など四百三十三万円、その他機械関係被害を合わせ総額は九千四百万円となっている。

一般被災者の救護対策として運賃割引の特別措置を八戸、宮古両市と田老、岩泉、普代の三町村に適用し、荷受人が知事、市町村長、日赤支部で被災者救助用寄贈品は無料。知事、市町村長が証明するもので被災者用物資、生活必需品、応急建築材料は五割引とし、期間は無料扱いは六月二十九日まで、五割引扱いは六月二十九日まで。

“住居と種子ほしい”

窮状を訴える畑部落

【田老で藤原特派員】部落の中心十五戸が全滅した田老町畑部落の被災者は悲惨だ。被災三日目を迎えて部落民はまだ夢遊病者のように焼け跡をうろつくだけで、救援隊員やこの日同部落にはいった簡保診療班の同情を買った。電話線の不通のため、部落民によって六キロ離れた役場に全滅の報が連絡されたのが三十日午前。このため部落民の救援も三十日午後になり、被災者九十九人は三十日夜焼け跡に野宿し、わずかに二張りのテントに頭だけ入れて夜露をしのいだ。田老町からのたき出しも三十日午前までに一回だけだった。部落民は夜は寒くて眠れないと、ヤニ目をしばたたきながら苦しさを訴えた。

同部落は田老鉱山のちょうど裏側で麦、ソバ、ヒエ、葉タバコなどを耕作しているが、四月上旬に雪が消えてからの降雨は一回だけ。干ばつとこんどの火事で、ことしは収穫皆無が予想されている。各戸でせっかく持ち出した種子も全焼し、これからは大豆、アズキをまこうにも種子はなく、あっても雨がなければ発芽しないとこぼしている。

同部落は四、五年前先祖代々育ててきた林道沿いの材木を利用して各自家を新築したばかり。三十一日午後にはほとんどが親類、縁者をたよって挨待、胡桃畑の部落に移動したが、部落に残っていた畠山長右衛門さん（六三）と畠山宮三さん（六〇）の二人は「たよりの救援がさっぱりなく、ほとんど親せきをたよって部落をさがった。糧もなく、ことしの畑作は期待できない。まず仮住居でも建てる資材と大豆など農作物の種がほしい」と窮状を訴えた。

田老鉱山に移動郵便車

きょうから業務開始

仙台郵政局は一日、焼け出された田老町田老鉱山へ移動郵便車を派遣、為替や、貯金の非常払いと一般郵便物を受け付ける。田老鉱山郵便局が焼失したため、同地区の郵便業務は田老郵便局が代行しているが、不便なので、盛岡統轄郵便局から仙台へ手配、移動郵便車は三十一日盛岡に到着した。郵便車は車内に事務用机と資材を積み、現金扱いと普通郵便物の受付窓が、設けられている。一日朝、盛岡を出発して午前中に現地へ到着、午後から宮古、田老郵便局員が交代で約一週間の予定で業務に当たる。

【写真は田老鉱山に送られる移動郵便車】

青森県の被害額は六十億円

【青森発】青森県では三十日午後五時、強風と大火の被害総額を約六十億円と発表した。おもな被害額の内訳つぎのとおり。農作物被害二十五億円、農業施設一十五億一千万円、リンゴ四億八千万円。

酪農廃業の人々も

再建けわしい岩泉地方

三十一日岩泉地方は大火をもたらした三日前の強風とはうってかわった無風のすがすがしい朝を迎えた。八十六世帯を青空のもとにほうり出し、八、九〇〇㌶の山林を焼きつくした二十八日以来の火は三十一日にも依然いたるところでくすぶりつづけているが、ほとんど延焼の心配はなくなった。

二十九日夜は一睡もせず、恐怖の一夜を過ごした岩泉町民も三十日夜はいつもよりはやく十時前後に床についた。焼け出された被災町民は一部がもよりの親類に身をよせたほか、袰野部落民五世帯九人は町からとりつけてもらった三つのテントに、中里部落民六世帯四十一人は、近くの中里小学校でぐっすりやすんだ。その日暮らしの岩泉町民にとって、住宅と家財を失った打撃はあまりにも大きく、大火の直後は焼跡のもとで放心する被災者もみられたが、大火後三日目を迎えるとさすが生気をとり戻し、町からたき出されたおにぎりとたくあんとほおばりながら、これからの生活対策を話し合ったり、朝早くから乳牛の搾乳にいそしむ姿が見られた。

苦しい生活にうちかってきた町民だけに、どん底から立ち上がる意気は根強いものがある。だが全町にみなぎる再起の意気のカゲには卒部被災部落民七世帯六十二人のように明日の生活対策に迷いつづけているところもある。同部落は二世帯が古くから酪農をやり、七世帯が肉牛飼育をつづけているが、こんどの火災で民家と畜舎を焼失、おまけに少しばかりの山林までも失って、明日からの生活のあてがついていない。このため乳牛や肉牛を手ばなさねばならない窮地に追いこまれている。

その一人竹花重平さん（七三）は、父重左衛門さんの代から三十年も酪農をつづけ、四頭の乳牛を飼っているが、こんどの生活をたてなおすには三十年間の酪農に見切りをつけざるを得ないと泣き泣き語っている。同村にとって、ちょうどいまの時期は米をはじめ麦、ジャガイモ大豆にしても、収穫期には大部間のある悪条件のもとだけに、被災者にとってのさしあたりの問題は食糧難だが、町当局ではいま救済対策を真剣に考えている。

岩泉で仮住宅の建設に着手

岩泉町災害救助対策本部では三十一日地元消防団二百人を動員、一本木駐とん自衛隊員百七十人の協力のもとに一日中残り火の整理にあたる一方、同町中里地内に被災者収容のための仮住宅の建設にとりかかった。仮住宅は三日ごろ完成するが、中里部落被災者を収容している中里小学校は五日まで休校する。山林火災は三十一日朝になってようやく延焼の心配がなくなったが、町が三十一日午前九時現在でまとめた山林焼失面積は八九〇〇㌶で、総額五億八千五百万円の損害に達している。内訳は針葉樹林八五〇㌶、二億四百万円、広葉樹林六、八五〇㌶、三億七千万円、植林まもない山、あるいは原野を含めたもの一、二〇〇㌶一千百万円となっている。

【写真はあすからの生活を語り合う被災者】

全国から援護物資

県災害対策本部は被災者に援護の手をさしのべようと呼びかけているが、三十一日になって全国各地から援護物資や義援金がぞくぞく送られてきている。鹿島組会長鹿島守之助氏が百万円、同組仙台支店長野田忠次氏が十万円、同盛岡出張所の従業員が十万円、安孫子山形県知事が十万円を送ってきたほか、日本キリスト教奉仕団が小麦粉、脱脂粉乳各三千ポンド、衣類五十コオリ、大洋漁業青森出張所からソーセージ八十本入れ三十箱、かん詰め四ダース入れ三千箱も届けられた。同災害対策本部は物資はなるべく早く被災者に送るよう手配している。

栃木県から十万円

【宇都宮発】栃木県は二十九日の東北火災にたいする見舞い金として青森、岩手の両県にそれぞれ十万円ずつおくることを決め、三十一日送金の手続きをとった。

沿岸火災義援金品

31日

▽五万円　盛岡市内丸岩手日報社▽百万円　鹿島建設KK会長鹿島守之助▽十万円　鹿島建設KK取締役仙台支店長前田忠次▽十万円　鹿島建設KK岩手県内従業員一同▽三万円　盛岡市浜藤酒造店▽五千円　同市新庄田中坂本文雄▽四千五百二十円　同市こけしホテル従業員一同（本館、別館、山荘）▽三千円　同市新庄田中城南製作所職員一同▽二千二百円　同市大通商店街協同組合婦人会。▽二千円　同市金光教盛岡教会▽千三百五十円　同市太田中太田佐藤仁助▽千百円　同市仁王新町下田隆▽千円　同市大通りこじま玩具店▽千円　同市新馬町高木一天▽千円　同市東大通りエデン従業員互助会一同▽千円　農林省岩手統計調査事務所救済会▽八百二十五円　二戸郡御返地小学校修学旅行一同▽五百円　岩手郡西根村大更下町公営住宅自治会▽五百円　盛岡市内丸菊池万▽三百円　岩手郡西根村佐藤富雄。

◇衣類その他▽ドライミルク十二カン入り十箱　哺乳ビン一包　森永乳業株式会社▽敷ふとん百枚　盛岡市東北製綿KK▽松葉屋菓子店栃沢▽盛岡市中野智子▽同市大通り商店街協同組合婦人会▽同市新庄田中吉島典弓▽同市内丸菊池万▽同市青山二丁目米内千代▽同市十三日町伊藤印刷▽同市鉈屋町七九吉岡雅永子。▽大沢川原町内会会長斎藤徳次郎▽第一子供会委員長鈴木利明▽第二子供会委員長金子エミ（衣類）

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。